



自然観察

No.107
2013.9月

目次

- ・2013年全道研修会報告 2
- ・「第24回滝野の自然に親しむ集い」実施報告 4
- ・第473回NACS-J自然観察指導員講習会報告 6
- ・蝶の採集と保護(5) 8
- ・海辺で出会う漂着物 2 石炭 9
- ・フィールドニュース 10
- ・ウォッチングレポート 13
- ・参加者の声 14
- ・事務局だより・連絡先 16



2回目の繁殖 子育てに忙しいカイツブリ(9月 野幌森林公園にて)

2013 全道研修会報告

北海道自然観察協議会副会長 酒井 健司

2013年6月1～2日に実施した全道研修会「6月の新冠判官館森林公園と十勝海岸湖沼の湿原と原生花園を歩いてみませんか」の概略を報告します。

参加者は札幌21名・恵庭3名・小樽3名・旭川1名・十勝5名・江別1名の34名。JR札幌駅から中型の貸切バスを利用、十勝の参加者は2日目から各自の車で合流しました。2日間、湿原研究の第一人者である矢部研夫さん（札幌市立大学教授）に全行程を同行のうえ、バスの中でのレクチャーと現地ガイドをしていただきました。

1日目は、新冠判官館森林公園の散策、天馬街道を、野塚トンネルを通過して晩成温泉からホロカヤントー湖畔の海岸植生の観察後、晩成温泉の宿舎「原生花園」に入りました。夕食時こは、2日目に道案内していただく十勝湿原研究所の矢崎友嗣さん、白井温紀さんの紹介と挨拶を白井隆所長にいただき、夜の懇親会にも出席いただきました。

2日目は、大樹町生花苗沼（オイカマナイトー）、浜大樹の海岸、当縁（等ベリ）川の右岸湿原、大樹町営晩成牧場、豊頃町長節湖の原生花園を観て、池田から道東道に入り高速自動車道で札幌へ、18時半ころ札幌に帰着しました。

両日とも、多少霧や小雨に会いましたが、行く先々ではタンチョウのつがいを観ることも出来、楽しく、研修を終えることが出来ました。

1. 新冠判官館森林公園

義経伝説のある新冠町の判官館森林公園には、海に突き出た判官岬とその内側の湿原、広葉樹林があり、標高約60m、66haの丘陵（海岸段丘）内に多様な群落が見られます。

アマニュウの同定のしかたについて、葉の「2～3回の3出羽状複葉」の説明を矢部先生から受けて森に入りました。例年より遅い春の訪れが、この時期には通常見られない花を観察できました。特に、オオバナノエンレイソウ、サクラソウが丁度盛りで、キタコブシもまだ花を咲かせていました。エゾカンゾウやガマズミ、コ

ンロンソウなどはまだつぼみの状態でしたが、スズランは開花し始めたところでした。カタクリは果実をつけ、クマガイソウの花はもう見られませんでした。植生リストにあった花の大きなウスイロオオバナノエンレイソウは現在、オオバナノエンレイソウの変異種とされるとのことです。



サクラソウ

タコッペ湿原には短いながらも木道があり、矢部先生からヒラギシスゲから出来るヤチボウズの構造や成長のしかたなどについて詳しい解説がありました。

矢部先生によるヤチボウズの説明



岬先端の風の強いところではエゾタンポポ、ハマハタザオも見られました。また、岬の崖の際を飛翔するインヒヨドリに感激しました。数人だけが見られたことに、見られなかった参加者は残念がっていましたが、2時間半の観察の

後、判官館森林公園を後にしました。

開花中のものは次のとおりでした。コテングクワガタ(外来種)、シロバナノエンレイソウ、タチツボスミレ、ムラサキヤシオ、キジムシロ、サクラソウ、ホソバナアマナ、キタコブシ、バイケイソウ、クルマバソウ、ニリンソウ、エゾタンポポ、ヤブニンジン、ヤチブキ(エゾリュウキンカ)、スズラン、ヒメイズイ、オオバタチツボスミレ、ハリスゲ、ハマハタザオ、エゾイタヤ、エゾエンゴサク、マイヅルソウ、チゴユリ

2. ホロカヤントー湖畔、海岸植物

晩成温泉につくと、キタキツネのネズミ?取りに出会い、小休止の後、海岸沿いに西へ500mほどにある瀉湖ホロカヤントーに向かいました。道沿いにはハマエンドウ、シロヨモギ、ハマニンニク、エゾコウボウムギ、フウロソウ、スミレ、キジムシロ、シコタンタンポポ(もしくはエゾタンポポ)、エゾオオバコ、ハマハタザオ、ハマボウフウ、ハマニガナ、スカシタゴボウが見られました。

ホロカヤントーの湖口は年に数回開く程度で、通常は砂州でとじられていて、引き続き海蝕台地上に特有な植生が発達していました。湖面と水際にはレッドデータブツ



クに記載されているエゾノミズタデ。

水面に生えるエゾミズタデ

海蝕台地上には、センダイハギ、ガンコウラン、マルバトウキ、ウシノケグサ、シャジクソウ、エゾノコギリソウ、ヒメイズイ、コウボウ、ナミキソウ、シコタンタンポポ、スズラン、ヤマハハコ、ハマベンケイソウ、ツリガネニンジンがみられました。

3 晩成温泉早朝散歩

2日目の早朝散歩は、温泉の裏側にあるふれあいの森からホロカヤントーを望む擦紋期の縦穴群までの散策が中心。森は海岸側がカシワが主の広葉樹林で開花しているオオバナノエンレイソウの大群落に大感動。ほかに開花していたものにはヒメゴヨウイチゴ、タチツボスミレ、ツボスミレ、カラマツソウ、スズラン、キジムシロ、エゾゼンテイカ、エゾイチゲ、コウボウが、縦穴群から海岸〜温泉までにはニョイスミレ、シロスミレ、スミレ、エゾオオバコ、エゾタンポポ、ハマエンドウ、ヒメイズイ、シコタンタンポポ、ツマトリソウなどがみられました。



森林内に咲き乱れるオオバナノエンレイソウ

4 生花苗沼(オイカマナイトー)

晩成温泉の東にある生花苗沼では大きなシジミがいて、資源保護のため年1回漁をしているという。シジミを処理する施設のところまでバスを降り、沼の景観を観る。



シジミの獲れる生花苗沼

タンチョウの番(つがい)が一つみられました。周辺は富栄養化でアシが茂っていましたが、開花しているエゾノリュウキン

カも各所でみられました。

5 浜大樹海蝕崖上の風衝地及び当縁川河口右岸湿地

浜大樹の海蝕涯の砂利道を東進すると右側車窓にガンコウランの群落が見えてくる。ここで車を降り、群落内には亀の子たわしと玄関マットで靴底の土を落として入りました。ここは、外来の植物が侵入しないよう現地の研究者もそのようにしているとのことでした。海蝕台地の海岸縁に出来たこの群落には密生したガンコウランの隙間や道沿いにセンダイハギ、シコタンタンポポ、フデリンドウ、スズラン、ヒメイズイ、キジムシロが咲いていました。

当縁川河口の右岸には湿地があり、シロスマレ、エゾカンゾウ、ヒメイチゲ、ハクサンチドリなどが開花中で、ほかにはヒオウギアヤメ、クロユリ、タチギボウシ、エゾノシモツケソウ、ナガボノシロワレモコウ、ムジナスゲなどが見られました。



当縁川河畔を観察

浜大樹の帰途、道の両サイドでキタキツネの子どもが巣から顔を出して私達を見送ってくれました。

長節湖に向かう途中、幕別町忠類にある町営牧場に立ち寄りましたが、ここではタンチョウのつがいが優雅な姿を見せてくれていました。

6 長節湖原生花園

豊頃町の長節湖は周囲 5km の鹹水(かんすい)湖で、太平洋と幅の狭い砂丘で隔てられています。海岸原生花園は、この砂丘上の中央を走る町道の両側の約 500m で、西端はキャンプ場と低く狭い砂州につながっています。スマレ、エゾオオバコ、ハマエンドウ、コウボウムギ、ハクサンチドリ、シコタンキンポウゲ、クロユリなどが開花していました。

帰途、豊頃までの沿道には道央ではもう散っていたエゾノウワミズザクラが満開でした。



長節湖

第24回 滝野の自然に親しむ集い実施報告

実行委員事務・会計係 池田政明

今年は滝野自然学園の抽選で第一・二希望日が取れなかったのですが、お盆にもかかわらず一般参加の8家族18名〔リピーター2家族〕と、指導員10名で『滝野の集い』となりました。

指導員は会を盛り上げるためにも、キャンプファイヤーでは飛んだり跳ねたり、歌やゲームに頑張りました。また1日目の『せせらぎウォッチング』『飯盒炊事・カレー』『夜の集い』『星空ウォッチング』『ナイトハイク』、2日目の『朝の集い』『自然観察ハイキング・ビンゴ』を、精力的に進めていきましたが、特に星空ウォッチングは、ベストコンディションで大好評でした。

今年は、初めての指導員の参加もあり、参加された家族とも交流を深め、楽しく過ごすこ

とができた集いでした。

実施日：2013年8月10日[土]～11日[日]

参加者：一般18名[大人9名、子供9名]

指導員10名[当日7名]

計28名

(1) 取組の経緯

- 6/22[土] 第1回実行委員会 札幌エルプラザ
- 7/13[土] 第1回下見 学園裏山・厚別川支流、「ハイキングコース・西エリア」
- 7/29[月] 学園に利用申込み書等必要書類提出
- 8/3[土] 第2回下見 学園裏山・厚別川支流[草刈り]、「ハイキングコース・西エリア」
計画細部の最終確認
- 8/6[火] 参加者申し込み締め切り、参加者名簿完成、班編成
学園に参加者数・給食数変更連絡、指導員マニュアル作成発送、保険手続き
- 8/7[水] しおり印刷、各種資料印刷、名札書き、雨天時のビデオ準備
- 8/10[土] 第24回 滝野の自然に親しむ集い[1日目]
- 8/11[日] 第24回 滝野の自然に親しむ集い[2日目]、反省会森の情報館[クラフト室]
- 8/14[水] 札幌市教育委員会へ後援行事終了報告書提出

(2) 内容と反省

- ・北海道ウオッチングガイドを見ての参加は、8家族のうち2家族、リピーターは2家族、知人の紹介、自然観察協議会の年間予定表、チラシで3家族、その他1家族でした。
- ・ナイトハイクは、いつもより森の中が暗かったせいかわ、星に手が届きそうでした。
- ・夜空もはれわたり、夏の大三角形をはじめ、天の川や流れ星などはっきり観察できました。
- ・懇親会、朝食では、子供たちに別々のテーブルを作ったのがよかった。
- ・朝の散歩では、鳥の観察、草笛が子供たちに好評でした。
- ・網でオオルリボシヤンマや、田んぼの中の生き物を採集し観察することができよかった。
- ・アンケートで参加者からは、札幌市内でこれだけの自然を満喫することができ、夏休みの良い思い出ができましたと好評でした。



楽しかったキャンプファイヤー



夢中になったせせらぎ遊び(魚とり)

473 回 NACS-J 自然観察指導員講習会報告

酒井 健司

1 はじめに

第 473 回 NACS-J 自然観察指導員講習会は、今年から 1 泊 2 日日程での開催となり、なごやかな雰囲気の中に無事終了しました。今回の講習参加者は 38 名を数え大変盛況でした。初日の天候は午前中小雨で先行きが心配されましたが、午後からは回復し、翌日は晴天に恵まれ、野外実習、ミニ観察会も無事に行うことができました。そして、19 名の方が北海道自然観察協議会の新しいメンバーになりました。

開催日	2013 年 6 月 15 日(土)～16 日(日)、1 泊 2 日	
会場	室内講習・宿泊：恵庭市青少年研修センター、野外実習・ミニ観察会：恵庭公園	
受講者	38 名(定員 40 名、申込み 39 名(病欠 1 名))	
参加費用	23,000 円(受講料、初年度登録料、NACS-J 個人会費、テキスト代、保険料、宿泊食費(1 泊 3 食)を含む)	
スタッフ (敬称略)	日本自然保護協会(NACS-J) : 3 名	福田博一(本部)、勝山智男(講師、静岡)、小関孝一(講師、青森)
	北海道自然観察協議会(NOC) : 5 名	横山武彦(会長)、村元健治(編集部長)、池田政明(事務局長)、三澤英一(会計)、酒井健司(副会長)
	同 恵庭支部 会員 : 6 名	池田厚、富田智恵、富塚陽子、九瀧雅恵、林祐子、間所公男
	同 帯広支部 会員 : 2 名	中村修一、中村典代

共催	公益財団法人 日本自然保護協会(NACS-J)、北海道自然観察協議会(NOC)
後援	北海道教育委員会、恵庭市教育委員

2 室内研修

講義① テーマ：「自然の保護」

講師：勝山智男氏

勝山講師は沼津高専の物理学の現役教師です。自然保護には自然のシステムの維持が大切であること、生物多様性の 4 つの危機、生物多様性条約等について解説していただきました。自然のシステムの説明にはエントロピーをもちいるなど物理の先生らしい難解な説明もありましたが、話の展開の上手さから受講者は理解を深めたと思います。また、「どこからどこまでが自然保護か？」という問いかけを受講者に投げかけ、問題意識をもたせる工夫がみられました。

講義② テーマ：「自然の観察」

講師：小関孝一氏

小関講師は青森で活動されている方で、職業は IT 関連です。やわらかな津軽弁にユーモアを交え、「自然観察」の奥義を解説していただきました。自然保護に至る過程は「自然に親しむ」→「自然を知る」→「自然を守る」ことであること、自然観察には五感を使うこと、自然観察会での最大の失敗は種名のみで解説で終わること、肝心なことは自然の仕組みを理解させること等の含蓄に富んだ話は興味深いものでした。また、自然観察会を開催するにあたっての諸手続きや注意など経験にもとづいた役に立つ情報にあふれていました。



講師の話を熱心に聴く受講生

3 野外実習

会場となった恵庭公園はカシワやハルニレなどの巨木が空を覆い、オオルリ、



指導員の説明を聞く

ゴジュウカラ、シジュウカラ、ツツドリなどの鳴き声に混じってアカゲラのドラミングが樹間にこだまする緑豊かな公園で、自然観察の材料には事欠くことがない恵まれたフィールドでした。講師の先生の解説は多様性とみ、受講者は熱心に耳を傾け、質問し、仲間同士で意見を交わすなど、充実した中に和気藹々とした雰囲気が漂っていました。

4 ミニ観察会

受講者一人一人が講師となって行う模擬観察会（ミニ観察会）は受講者のみならずスタッフも緊張しましたが、それは杞憂でした。いざ実践となると、受講者はリラックスした表情で、すでに備わっている知識と経験をベースに、講師のアドバイスを適宜取り入れ、恵庭公園の自然の素材を巧みに使って、堂々とした解

説ぶりでした。各人に与えられた時間は5分でしたが、それを超過することも多く、中身はそれ以上に相当するものでした。



受講生が講師となってミニミニ観察

5 懇親会

初日の夕食後、受講者と運営スタッフが一同に会し、なごやかに懇親会が行われました。自己紹介は各テーブル（7から8名）毎に行われ、活発な会話が交わされました。なるべく多くの人と知りあうために、15～20分毎に席替えを2回行った結果、時間のたつのを忘れるほどに盛り上がりました。これを機会に新しい交流が始まることが期待されます。

6 おわりに

第473回NACS-J自然観察指導員講習会はスタッフの奮闘と受講者の協力のもとに無事終了いたしました。今後受講者の方々が指導員として活躍されることを期待するとともに北海道自然観察協議会がバックアップ体制を充実することが必要とされます。末尾になりましたが、スタッフと受講者の皆様に厚くお礼申し上げます。また、恵庭の会員の方々には一方ならぬご尽力をいただき、講習会の運営が一層充実したものになったことに対し、重ねてお礼申し上げます。

チョウの採集と保護(5)

昆虫ボランティア 青山慎一

オオルリシジミという草地性のチョウは、国内での産地が極めて局地的な希少種である。

長野県安曇野の個体群は、農地の大規模化によって生息地が徹底的に破壊されてしまった。このチョウの食草であるマメ科植物のクララは、古くは薬草として珍重され大切に手入れされてきたのだが、この農地改革によって里山が荒廃し、生息環境がさらに悪化してしまった。そのため国のレッドデータブックでは絶滅危惧種のⅠ種に分類されている。

信州大学の研究者や地元の愛好家たちは早くからこのチョウの保護に取り組んでいて、最初はクララの手入れと並行して、飼育で育てたものを放すという方法を繰り返したが、いっこうに効果は現れなかった。詳しい調査の結果、寄生性のハチやハエが深く関与しており、中でも卵に寄生するタマゴヤドリバチの被害が甚大であることが判った。また生息地の表土からは、平安時代から定期的に野焼きが行われていた痕跡が発見された。

そこでオオルリシジミが土中で蛹になる時期に合わせて野焼きを行い、ヤドリバチの発生を抑制したところ飛躍的に成果が上がったという。

この実践では、チョウの研究者や愛好家ばかりでなく、ハチやハエの研究者、植物の愛好家、さらにはかつて罵(ののしり)あった野鳥の会など幅広い叡智を結集し、地域の歴史や風土まで踏み込んだ取り組みが高く評価されており、今後のチョウの保護を考える上で格好のモデルと言えよう。このような事業に対し行政が便宜を計らい、資金面での援助などをしてくれれば申し分ないのだが。

「チョウのことはチョウの専門家に任せればよい」という意見があるかも知れない。もし専門家を大学の先生や各種試験場などの研究機関の研究者、博物館の

学芸員を指すのだとすれば、残念ながら北海道にチョウの専門家は一人もいないし、全国的に見ても10指に満たないであろう。今の時代、チョウの研究だけでは職が得られないからである。

それ故、チョウの保護に関してわれわれアマチュア愛好家の果たすべき役割は益々大きくなってきているのだが、実はこれもまた先行きが怪しくなっている。例えばわが国最大の組織である日本鱗翅学会(構成員のほとんどがアマチュアを占める)では、高齢化と新入会員の減少により毎年100名単位で会員が減っている。最盛期には300とも言われた地方の昆虫同好会も今やその10分の1以下になってしまった。



小笠原の調査が島民の告発がきっかけであったように、もつと多くの市民が昆虫や植物や野鳥を通して自然環境の変化に関心を持つことが必要なのだと思う。

私はこのような市民モニターの育成が必要と考え、これまで全道各地で標本の展示による啓蒙活動と、主として小学生を対象とした昆虫教室や自然観察会を行ってきた。

現在も市内の小学校中高学年を対象に公益法人・北海道自然体験学習財団が主催する「子供自然体験塾」(俗称・青山塾)を実施しており、今年もこれとは別に紋別市立博物館での昆虫標本展と地元の小学生との採集会、標本作製実習を予定している。

もう決して若くはないが、体力が続く限りこの取り組みを続けると共に、この事業の後継者の育成にも力を入れてゆきたいと考えている。(終わり)

海辺で出会う漂着物 2 石炭

いしかり砂丘の丘風資料館学芸員 志賀健司

春から初夏。石狩の浜辺には“黒い石ころ”がたくさん転がっていることがあります。石狩湾に面した、石狩市厚田区の無煙浜（むえんはま）。石狩川河口の北側、長さ1kmくらいの小さな砂浜ですが、ときどき、大量の黒い石が打ち上がっていることがあります。石炭です（図1）。そのことは昔から地元の人たちには知られていました。秋になると、冬の暖房用燃料のために石炭を拾い集めたそうです。

石炭は、過去の植物の化石。植物遺骸が泥や砂に埋没した後、長い年月の間に地熱や圧力によって変質してできた、可燃性の岩石です。世界の大きな炭田は主に古生代石炭紀（3億5900万年前～2億9900万年前）に生育していた植物が起源です（だから「石炭紀」と呼ばれる）。それに対して日本で産出する石炭の多くは、新生代古第三紀（6600万年前～2300万年前）の植物に由来しています。

無煙浜に漂着する石炭は、いったいどこからやってくるのでしょうか？

海底に炭層（石炭を含む地層）が露出している。太平洋戦争の最中に沖で石炭を運ぶ船が沈んで、沈没船から少しずつ流出している。地上の炭層を川が削って運んでくる。これまで、いろいろな説が言われてきました。

実は石炭がたくさん見つかる海岸は、無煙浜だけではありません。石狩川河口を挟んだ反対側、南側にあたる石狩浜にも、大量の石炭が漂着するのです。北海道教育大学の岡村聡教授らは、漂着石炭は石狩川河口周辺の浜に集中していること、他の川の河口周辺ではほとんど見られないこと、石炭とともに、豊平川（石狩川の支流）から運ばれてきた軽石（4万年前の支笏火山の火砕流堆積物）もたくさん見つかること、などから、無煙浜の漂着石炭は石狩川から海に放出されたものが起源である、と結論づけました（岡村ほか2005）。

石狩川の上流には、空知や夕張など大規模な炭田がたくさんあります。これらはまとめて石狩炭田と呼ばれ、日本最大規模のものです。



図2 河口で見つけた最大の石炭塊 直径は28cm



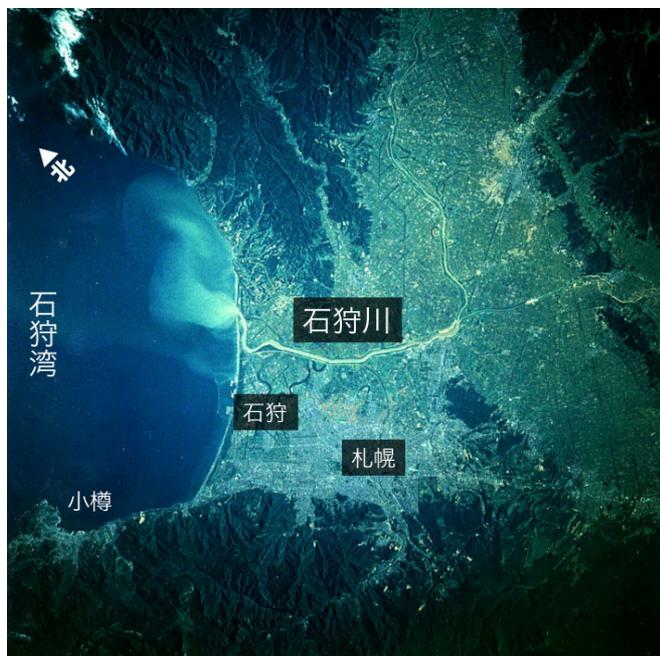
図1 砂浜にたくさん漂着する石炭

石狩川の本流や、支流である空知川、幾春別川、夕張川などの流れが、石狩炭田の石炭を運んでくるのです。ただし、自然に川底に露出している炭層が削られてくるのか、人が掘った炭坑から流出してくるのかは、わかりません。

確かに、石狩浜でもたくさんの石炭が漂着しているのを見ることができます。多くは1～2cmの小石程度のものですが、石狩川河口に近づくほど数も増え、大きな物も目立つようになります。河口のそばでは直径5cmを越える石炭も珍しくありませんし、過去には長径28cmに達する石炭塊も発見したこともあります（図2）。

石狩湾を宇宙から撮影した画像を見ると、大量の濁った水が石狩川の河口から湾内に流入しているのが、はっきりとわかります(図3)。

宇宙まで行かなくても、春に石狩浜に行けば、海の水が2色にくっきりと分かれている様子が見えることがあります。青い海水と、黄土色の濁った水がぶつかり合っているのです。青い水は普通



の海水、濁った水は石狩川河口から流れてきた大量の雪解け水です。実際に採水して塩分濃度を計測してみると、前者はだいたい3%くらい、後者は0.1%以下しかなく、舐めても塩味はほとんどわからないくらいです。それほど海水を薄めてしまう膨大な河川水が、上流から石炭を運んでくるのです。

石狩川に起源を持つ漂着物は、石炭だけではありません。流木やアシ、落葉など、やはり雪解けの頃や大雨の後に大量に河口近くの浜に漂着します。ペットボトルのようなプラスチックゴミもたくさん見られます。このように、陸で捨てられたものは最終的に海にやってくるのです。

そんな陸起源の漂着物が集まっている所をよく探すと、ごく稀にコハクを見つけることもできます(図4)。コハクは、松ヤニのような樹脂の化石。石炭と同じく陸上の維管束

図3 宇宙から撮影された石狩湾(NASA)。大量の土砂混じりの水が海に流れ込んでいるのがわかる。

植物が起源なので、地層の中だろうと漂着物だろうと、石炭のあるところには一緒にコハクが含まれている可能性が高いのです。

石狩浜で見つかるといっても、せいぜい1cmくらいの小さなもので、宝石になるようなきれいなものは滅多にありません。

そもそも、石炭と違って、よっぽどじっくり探さないと見つかりません。石狩浜でコハクを拾い集めて商売しよう、という考えは持たないほうが良さそうです。



図4 石狩浜で発見したコハク

フィールドニュース

FieldNews

身近にあるフィールド

釧路市 佐々木 文雄

釧路市民の身近にあるフィールドを紹介したいと思います。

春採湖(はるとりこ)は釧路市の南東部に位

置する海跡湖で、昭和12年(1937年)12月に「ヒブナの生息地」として国の天然記念物に指定されました。ハルトリとは山田秀三氏による

と、アイヌ語でアル・ウトル「岬山の向こう側の土地」という意味で、釧路の人々が山向こうの土地の意味で呼んだといわれています。

湖の概要は面積 36.1ha、周囲 4.7km、標高 0.63m、水深は最深 5.7m で平均 2.3m、特徴は市街地にあつて多くの動植物が生息しており、ヒブナや国の指定史跡もあつて自然観察や遺跡探訪ができる環境が残されていることです。

次に動植物の概要ですが、魚類は 4 科 8 種、鳥類は海辺の鳥、山野の鳥、湖沼の鳥など 36 科 129 種が観察されています。また、草花は 300

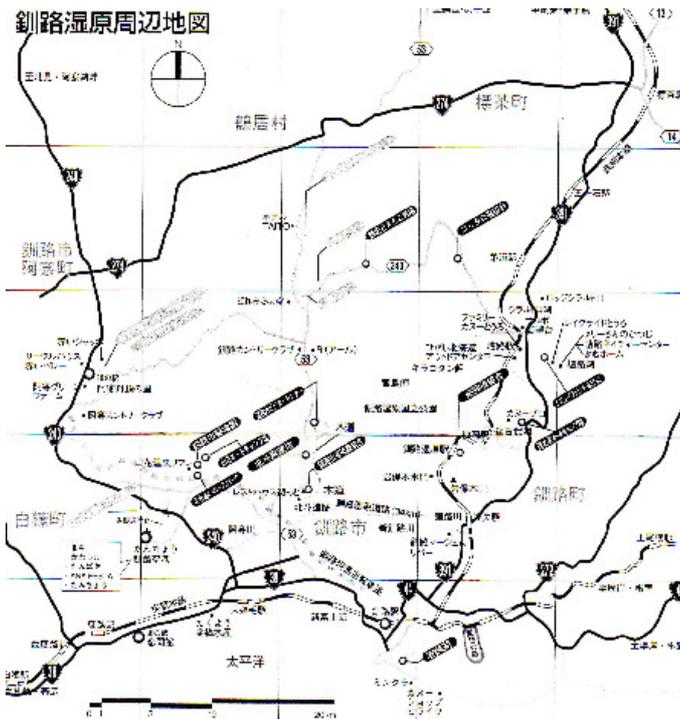
種余りで、湖岸をヨシの群落が帯状にふちどっています。昆虫も数多く生息し、チョウ類 47 種、トンボ類は 25 種などが報告されています。

このような、街の中のオアシス的存在の春採湖には、大勢の市民がウォーキングやジョギングを楽しむために訪れ、周遊路を行き来する人たちと挨拶を交わしながら、一周 4.7km の変化に富んだ眺望を楽しんでいます。もちろん、各種団体や機関の主催する探鳥会、動植物や水辺の生き物観察会などが随時開かれ、格好のフィールドとして愛されています。

この春採湖から北東約 3km の所に、森の学校と評価される「武佐(むさ)の森」があります。もともと鉄道防雪保安林として残されていた、住宅地に隣接するおよそ 10ha に樹齢 400 年近いミズナラの大木を始めとする落葉広葉樹がうっそうと生い茂り、50 種余りの野鳥がさえずる豊かな森で開花時のオオバナノエンレイソウの大群落はとりわけ、人々の目を楽しませて

います。このように、市民生活のすぐそばに自然の宝庫が広がっていることを、私たちは誇りに思っています。会員の皆様もご来釧のときにはちょっと時間を割いて、ご自分の目でお確かめいただけませんか。お待ちしております。

今回は釧路市中心部のフィールドを紹介しましたが、近くには釧路湿原・阿寒・知床国立公園や厚岸・野付風連道立自然公園、そして京大研究林が標茶町と白糠町にと、多くのフィールドに恵まれていることを付記し結びとします。



何の苦もなく見られる大好きな錦沼・小沼の散策

苫小牧市 渡部悦子

木道に紅ひとはけのコブシ散る、そんな季節もすぎ、山はアオダモの花が満開。良い香りをただよわせております。錦大沼を前に雄大にそびえる樽前山もすっかり雪もとけ、登山シーズンを迎えたようです。

錦大沼・小沼の散策路も小さな花から丈の高い花々とかわろうとしております。キビタキ、オオルリ、カラスヘビ。何の苦もなくみられるこの地を私は大好きです。ランも 10 数種みられ、それで十分です。

クマゲラの餌場を観て

江別市 森 繁寿

野幌の森を散策しているとクマゲラが大木に巨大な穴を掘って採餌している場面に出くわすことがある。

クマゲラは大木でどのように採餌しているのかその行動等を観察してみた。

1. 木に円錐状の丸い穴を掘るタイプ

トドマツの中程に止まったクマゲラを観ていると、最初に嘴で外皮を剥ぎ落とし舌先で入念に幼虫の居場所を探り、次に幼虫が潜んでいる位置を特定すると一気に嘴を木に打ちつけて円錐状の丸い穴を掘るのが特長でその所要時間はわずか10分余り。穴の奥から引き出されたのは体長6cm余りの大きな幼虫でした。

2. 木に長四角形の深い穴を掘るタイプ

大木の地面から約1~2mと低い位置に長

四角形の深い穴を掘るのが特長である。穴を掘る所要時間は長く30分から1時間に及ぶことがある。

ちなみに穴の奥行きは、約14~24cm、また穴数は大小で2~5個位見られる。

ところで木の低い位置に潜んでいるのは、アリ(ムネアカオオアリ等)が多くクマゲラはたっぷり時間をかけて捕食していた。一連の観察の結果、クマゲラが掘る穴の位置や穴の形等で潜んでいる虫の種類も異なること。またクマゲラの糞の内容物を調べてみると、アリの残がい等が多かったことがわかった。今後とも様々な視点で観察を続けたい。





変化に富んだカタクリの突硝山 2013/5/12

5月12日(日)、一般参加者12人、指導員4人、取材のため同行された道新記者の計17人による突硝山観察会。

例年にない寒さのためカタクリの開花は10日ほど遅れたが、山を少し登るとカタクリの群落がある。この日は、扇の沢ルートを歩くが、最初は湿地帯でミズバショウ、ザゼンソウが見られた。他にエゾエンゴサク、フクジュソウ、ナニワズ、エンレイソウ、ネコノメソウ等。

最初の湿地帯から広葉樹林、放牧跡地で

草木の少ない明るい所、暗い針葉樹人工林と歩くたびに木の種類等が次から次へと変化に富む山である。

途中、シラカバがあちこちで根こそぎ倒れているのが目につく。そしてササ等が生えていない所が少しでもあると自生しているカタクリ。毎年この時期1ヶ月程のみの活動。7~8年かかってやっと咲くカタクリ! その生命力に驚かされた。

(原部 剛)

奇跡の自然海岸~ハマナスの咲くオタネ浜~ 2013/6/22

夕べの雨もようやく上がり、何とか観察会ができそうでほっと一息。

指導員6人に対し一般参加者が10人とまずまずの参加者数。

初めにオタネ浜が大都会に近接する貴重な自然海岸であることをPRした後、それを実際に五感で体感してもらうことを伝えてスタート。

汀から順に砂浜、砂丘、後背湿地、そして後背林の順で見ていった。

途中でバギー車の乗り入れで海浜植物が

剥ぎ取られて踏み固められた道や、一般ゴミだけでなく業務用の大型ゴミまで捨てられている様に、一同溜息をつく。

しかし、そうした中でも丁度、満開を迎えたハマナス、ハマエンドウ等の花々の美しさ、ヒシの葉などが生い茂ってひっそりと佇む川跡(沼)、うっそうと繁る日本一と云われるカシワ林等に接して皆、感動の声を挙げていた。

(村元 健治)

2013年講演会・フォローアップ研修会の開催のご案内

今年も例年通り講演会と忘年会を下記の通り開催しますが、今年は新たに開催するフォローアップ研修会と兼ねて行いますので、新指導員はもちろん一般指導員の皆様、是非ご参加ください。

- ◇日時 平成25年11月30日(土) 午後1~4時(忘年会は講習会終了後、別会場で開催)
- ◇場所 「かでの2.7」1010会議室(札幌市中央区北2条西7丁目)
- ◇テーマ(予定)「自然観察の奨めと自然観察指導員としての役割と責務」・「自然観察会の開催方法とその進め方のポイント」等について行う予定です。

「救急救命講習会」は、本年は平成26年1月18日(土) 午前10時~午後4時にかでの2.7で開催します。詳細は次号の会報でお知らせします。



参加者の声



野幌森林公園観察会 13/5/26

大麻東小学校 4年 新谷 凜菜

横山さん、5月26日はいろいろなことを教えてくれてどうもありがとうございました。

自然の中では街中では聞こえない鳴き声、見られない物がたくさんありますね。5月に学校の遠足で同じ森林公園を歩いた時には気づかなかったのですが、1ヶ月もかからない花や草、何年、中には十何年もかかる植物などがはえていたり、サッポロマイマイという大きいカタツムリなど、始めて見た植物や生き物がいたのでびっくりしました。

私は昆虫などの生き物が好きなので、森の観察会は興味がありました。あの時、植物の話の聞いたり、小さいカタツムリを探したり、自然の中で歩くのが楽しかったです。

歩き終わってゴールした時、改めて自然は大事だなあと思いました。なぜかというと、自然をなくしてしまうと、植物も死んでしまったり、自然の中で暮らしている小さな虫や生き物達が大変な目にあってしまうたり、困る虫や動物もいると思うからです。

いろいろなことを教えてくれて本当にありがとうございました。また自然と触れ合える観察会に参加したいです。

大谷地の森公園 13/6/2

宮越 洋子

ぐずついた天気も2、3日前から一気に初夏。

ライラックの蕾綻び、モミジ、シラカバの花が咲き始め、北限のコナラも生き生きと一。若葉の緑が眼に優しく爽やかに晴れ

た日。参加人数20名ほど。学生から80代まで男女ほぼ半分。1年振りにお会いする指導員根岸先生。年齢を感じさせぬ程若い。近々植物の本を出版とか是非手元にとと思う。

「大谷地歴史展望」の資料を配布され、明治から大正、昭和の地図を手に現地高層マンション等に囲まれた素敵な自転車ロードに立ち感慨も一入(ひとしお)。明治30年創立の大谷地神社、大谷地の森公園と保存林の散策。

ヒトリシズカ、エンレイソウなどの数々の花々。

タンポポ、アキタブキの説明も興味深く、自然の変わらぬ営みと、祖先から営々と進歩しながら続く人間社会を改めて感じた半日でした。

石狩はまなすの公園 13/6/29

矢木沢徳弘

当日は快晴、気温は20℃を超え、浜風がとても心地よく、最高の観察日和でした。たくさんの花を見ることができました。真紅でいい香りのハマナス、ハマヒルガオ、ハマエンドウ、ハマハタザオ、レース状に広がるハマボウフウの花、その大群落には驚かされました。保護にかかわった方々の努力に拍手です。野鳥にも感動。ヒバリ・ノビタキ・コヨシキリが目立ち、ホオアカ・オオジュリンも。海岸土手の巣穴をひっきりなしに出はいるショウドウツバメ、海岸すぐ近くで小魚をねらってダイビングするアジサシも印象に残りました。

何よりも良かったのは、オカヒジキを追いやるオニハマダイコンなどの帰化植物が子孫を増やす戦略、海浜植物が風・砂・日光から身を守る知恵・地下茎が砂浜を守っていることなど指導員の方々からいっぱい話を聞いたことです。ありが

とうございました。

滝野の自然に親しむ集い

13/8/10・11

鈴木 ユカリ

今回初めて第24回滝野の自然に親しむ集いに参加しました。全体的なプログラムの構成は良いと評価できました。個人的な感想を述べますとはじめまして仲良しゲームではお互いに知るために、カードを使用したことは子供達にも分かりやすかったと思います。その後のオリエンテーションと食事ですが、もう少しアイスブレキングを取り入れても良かったのではと思います。

食後にせせらぎウォッチングでしたが、子供も大人も楽しめた行事だったと思います。野外炊事も子供達が役割があることで協力することを学べたのではと思います。

夜の集いは最初にキャンプファイヤーを始めましたが、自然学園の職員がリードをとり子供も大人も真剣に取り組んでいたから最後のオチでとても楽しむことが出来たと思いました。

ナイトウォークでは、残念ながら動物達の声は聞こえませんでした。安全に散歩が出来ました。

星空ウォッチングではシートが湿っていたのが、ほかの参加者からも声が上がっていたので、次回に良い方法をお願いします。夏の星座は見つけづらいと聞いたことがありますが、たくさん説明をしてくださり、流れ星も見ることが出来て満足しました。

最後にせせらぎウォッチング、ナイトハイク、すずらん公園自然観察ハイキングの帰りに、保護者にダニチェックの声かけをしていなかったのが残念でした。

♡会計からのお願い

- ・当会は、会員各位の会費によって運営されています。お蔭様で順調に納入されていますが、会費をまだ納めていない方は、同封の振込用紙をご利用ください。
- ・年会費は1,500円です。また未納期間が2年の方は3,000円となります。振込用紙を確認の上、納入お願い致します。
- ・退会の申し出があるまで北海道自然観察協議会の会員です。届出が出されるまで、会費をお支払いしていただきます。

・郵便振替番号 02710-1-8768 北海道自然観察協議会
三澤 英一



事務局便り

☆第 473 回 NACS-J 自然観察指導員講習会の開催の結果、新会員(新指導員)が一挙に 19 人も入会されました。大変、嬉しい事で今後のご活躍を期待します。

☆「滝野の自然に親しむ集い」指導員の一人として初めて参加しました。滝野に着くや否や驚いたのは、頭の上から降り注ぐセミ時雨でした。子供たちは夢中になってセミを追い回していました。

また、宿泊の会場になった建物が元小学校の校舎だったもので、木造の大変、懐かしいものでした。

☆本会報に生き生きした動植物の写真を提供してくれている本協議会の編集部員の森 繁寿氏が、このほどエゾフクロウの生態を紹介した写真集『エゾフクロウの魅力～野幌の森での出会い・発見・感動～』を自費出版された。

本会報の 102 号(2012.6 月)にも掲載された雛 5 羽の微笑ましい写真を含めて 51 枚にもわたる様々な様子・生態の写真を掲載している。自然観察指導員の撮影した写真だけに、特長・生態等について適格に紹介されている。

同氏のカメラ暦は 30 年にもなるそうだが、野幌森林公園に通い始めて 15 年。主に野鳥、植物を対象に撮影をしている。北海道新聞野生生物基金が行う「北海道新聞野生生物写真コンテスト」にも応募し、2012 年と 2013 年にそれぞれ入選を果たすほどの実力の持ち主だ。購入を希望される方は、森さんにご連絡願います。Tel/Fax011-385-6571
A5 版 23P 建て。(K.M)



【連絡先】北海道自然観察協議会のホームページ <http://www.noc-hokkaido.org/>

会費や寄付は 郵便振替口座 02710-1-8768

会 計 三澤 英一 北広島市松葉町 5 丁目 9-16

会費振込加入者名 北海道自然観察協議会 三澤 英一

観察会保険料は 郵便振替口座 02770-9-34461

観察会担当会計 小川 祐美 小樽市望洋台 3-13-5

TEL/Fax 0134-51-5216 E-mail streamy@estate.ocn.ne.jp

観察会報告書・資料は 観 察 部 山形 誠一 札幌市中央区双子山 1 丁目 12-14

TEL/Fax 011-551-5481 E-mail seichi.y@jcom.home.ne.jp

退会、住所変更の連絡は 事務局 池田 政明 札幌市北区麻布町 4 丁目 9-16

TEL/Fax 011-708-6313 E-mail ecology@cocoa.ocn.ne.jp

事故発生等緊急時はアスカ・リスクマネジメント 担当 本間氏 TEL 011-873-2655

投稿や原稿は 編 集 部 村元 健治 札幌市手稲区星置 2-8-7-30

TEL011-694-5907 E-mail cin55400@rio.odn.ne.jp

表紙写真 森 繁寿

自然観察 107 号(16)



自然観察 2013 年 9 月 15 日 / 第 107 号 年 4 回発行

(会員の『自然観察』購読料と郵送料は会費に含まれていません。)